

2017. 5. 30

No.201

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



5. 3 憲法記念日に
1400人が参加
撮影・石井一弘さん

「共謀罪」のない安心して暮らせる社会を望みます



4月15日に「銀河通信」200号達成を、読者のみなさまに祝っていただきました。我が家の歴史を振り返ると、決して順風満帆ではありませんでしたが、くじけそうな時も、「銀河通信」を発行しなければという思いとそれに応えてくださった読者に支えられました。

少しホッとしたのか、再び編集することになかなか向き合えずにきました。200号からはや2ヶ月。やっぱり書かなくちゃとパソコンに向かっています。

5月23日、「共謀罪」が衆院本会議で、自民、公明、維新の賛成多数で衆院を通過しました。審議を十分尽くしたとはいえません。戦争も原発も嫌だと書いてきた「銀河通信」は発行ができなくなるかもしれません。自由に物が言えない社会は、戦前に戻ってしまいます。市民の力で「戦争への道」は許さないと声を上げていかなければと思います。

内心の自由を侵害する法案成立を強行する安倍独裁政治は、あまりにも驕っています。今でも監視社会だと感じる事が多いのに、ますます物言えぬ社会になるのは目に見えています。共謀罪がまだ通ったわけでもないのに名護市辺野古への新基地建設に反対しキャンプ・シュワブゲート前で抗議行動を展開していた沖縄平和運動センター議長の山城博治さんは米軍の日本人警備員に拘束逮捕され、長期にわたって勾留されました。まるで治安維持法の時代を思わせる出来事でした。「共謀罪」には国連特別報告

者からも懸念の声が上っています。

憲法前文には「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。」と明記されています。憲法違反の「共謀罪」法案は参院で押し返しましょう。

作家の辺見庸さんは「内面の死滅」という文章にこう書いています。「われわれは『思う』『想像する』だけで犯罪者と判じられかねない。すでに成立している特定秘密保護法と共謀罪がセットになったら、いったいどんなことになるのか。いま、狙われているのは人々の内心であり内面である。」（「生活と自治」2017年3月号）

5月の連休にチャップリンの「独裁者」（1940年）を観ました。鋭い感受性でナチズムの危険性に気づき、全身全霊でヒトラー批判の映画を作ったのが無声映画の雄、喜劇王チャールズ・チャップリンでした。床屋チャーリーが全世界に呼びかける6分間の演説は、チャップリン自らが書いたスピーチでした。少しも古くなく、今の時代につながるメッセージに勇気づけられました。

「私たちは皆、助け合いたいのだ。私たちは皆、他人の不幸ではなく、お互いの幸福と寄り添って生きたいのだ。私たちは憎み合ったり見下し合ったりなどしたくないのだ。この世界には、全人類が暮らせるだけの場所があり、大地は豊かで、皆に恵みを与えてくれる。人生の生き方は自由で美しい。しかし、私たちは生き方を見失ってしまったのだ。欲が人の魂を毒し、憎しみと共に、世界を閉鎖し、不幸、惨劇へと私たちを行進させた。私たちはスピードを開発したが、ゆとりを与えてくれる機械により、貧困を作り上げた。絶望してはいけない。新しい世界のために、君たちが未来を与えられる、常識のある世界のために闘おう。世界を自由にするために、国境のバリアを失くすために理性のある世界のために、全人類の幸福へと導いてくれる世界のために闘おう」（抜粋）

タンポポの綿毛のように全国に広がった「銀河通信」 読者、200号祝う会に70人！



参加者の皆さん

4月15日、「銀河通信」200号達成の祝賀会を長年の読者である友人たち16人が実行委員を引き受

け、北光教会で手作りの祝う会をして下さいました。

参加者は東京 鎌倉、秋田、他の取材で九州からも。登別、旭川、千歳、苫小牧、札幌と70人でした。

祝賀会は福原正和さんが司会。小野有五さんの挨拶に始まり、フンベシスターズ&小野有五さんの歌と朗読では、原田公久枝さんが十勝アイヌの伝承の歌を力強く歌い、小野有五さんはアイヌ神謡集の一説をフランス語で朗読。崔善愛（チェ・ソンエ）さんのピアノ演奏では映画「戦場のピアニスト」で一躍有名になったショパンの名曲、ノクターン嬰ハ短調く遺作を苦難のポーランドやショパンを想像しながら聴き入りました。善愛さんは、前日のピアノ・トークコンサートでショ

パンのバラード第一番などを同じ教会の大ホールを満席にして演奏。ショパンの深い悲しみを表現されて感動しました。

音楽演奏の後は、パワーポイントで200号までの軌跡をたどりました。この原稿を作るのが一番大変でした。28年分の通信から主要な記事を選ぶのですが、ホームページのバックナンバーを頼りにピックアップしましたが、今の時代が、まさに言論の自由が脅かされていることに、小さな声でも伝え続けることの大切さを、再認識しました。

調布市からいらして下さった松浦幸子さんは心臓病を持つ人々が、安心して地域で暮らし、自分らしさを取り戻せる居場所、レストラン・ッキングハウスを設立されました。今年30周年になります。私も会員です。なかなかお目にかかる機会がありませんでした。お互いの通信の長い読者です。松浦さんは「君は君の主人公だから」（笠木徹作詞・作曲）をアカペラで歌って下さいました。「君のやさしさは君のものだから とりかこむ世界にゆだねてはいけない 昨日を今日につなげるために 今日を明日に 手わたすために」と。ふっと悲しかったこと、苦しかったことなどが目に浮かび、涙があふれました。花束を贈呈して下さいましたのは、東京中野区からいらして下さった宮本紀子さん。旭川で自然保護運動と一緒に頑張った友人です。締め挨拶をされたのは、植村隆さんの裁判を支える弁護団の要として奮闘していらっしゃる伊藤誠一さんです。「銀河通信」の役割に触れてくださ

-2- いました。



撮影・石井一弘さん、及川文さん
上から福原正和さん、小野有五さん、原田公久枝さん、崔善愛さん、会場風景、松浦幸子さん、安積遊歩さん、宮本紀子さん、伊藤誠一さん

ハンセン病市民学会・交流集会に参加しました



ハンセン病市民学会が5月19日から21日まで、高松市と岡山市であり、「ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会」のメンバーと参加しました。

統一テーマは「島と生きる」です。今年は13回目。初日は、高松港から約20分で大島に渡り、大島青松園周辺のフィールドワーク、60年間、青松園で暮らした方のお話、シンポジウムと盛りだくさんでした。（写真・大島から眺める美しい瀬戸内海）



今回とてもいいなあと思ったのは看護学生ら若い世代の人たちが市民学会の運営ボランティアとして参加されていたことで

した。私たちのグループはこえび隊の笹川尚子さんに案内していただきました。こえび隊のメンバーは、来島者に大島やハンセン病の歴史を知ってもらう活動をされています。

穏やかで美しい瀬戸内海が一望できる場所に「風の舞」がありました。（上写真）亡くなられた方の骨壺に納めた、残りの骨を納めています。このモニュメントには「せめて死後の魂は風に乗って島を離れ、自由に解き放たれますように」という願いがこめられました。詩人の塔和子さんも大島青松園に入所されていました。



「風の舞」に行くのは坂道を登りますが、降りてくるとミニ八十八カ所（左）がありホッと安らぎました。

大島会館で開かれたシンポジウムには全国各地から300人が参加し「大島の過去、現在、未来」をテーマに入所者や学生がさまざまな視点で語り合いました。

入所者の磯野常二さん（85）は小学5年生で青松園に来ました。「食糧も乏しく、飲料水も不足。地下水を利用した。さらに医師や看護師も足りず、不自由者の世話や葬儀から供養まで全部を行った」と語りました。青松園自治会長の森和夫さん（76）は「100人を越えていた入所者が、ここ7年で58人に減少している」「内科医の不足が深刻」と述べました。

四国医療専門学校の看護学科では、青松園での訪問学習で差別と偏見に苦しめられてきた入所者の思いを聞き、看護の在り方を学んだと語りました。善通寺市の中学生のボランティアクラブは「大島ラブストーリーをつくろう」と大島の新しいイメージづくり、魅力づくりに取り組

み、ビデオに上映しました。夜のレセプションも5人の方が、大島青松園の入所者との交流をリレーで紹介。差別や偏見を無くすにはこういう日常の触れ合いが大事なんだなあと感動しました。

（写真・映画「風の舞」監督の宮崎信恵さんと井上、浅川夫妻と）



2日目の20日、岡山市市民会館で「隔離の歴史をのこし、つなぐ」と題するシンポジウムが開かれました。西日本弁護士共同代表の

徳田靖之さん、入所者協議会会長の森和男さん、建築計画学の東大教授、大月敏夫さん、瀬戸内市市長の武久顕也さんが意見を述べました。

徳田さんは「全療養所で1400人が暮らし平均年齢は84歳になる。この1～2年で制度づくり、法整備を急ぎたい」。森さんは「全部の療養所の永久保存を国に要請している」。大月さんは「愛生園にある十坪住宅はハンセン病の負の歴史を伝える大事な場だ」と提言。武久さんは「療養所の世界遺産運動を進めている」と述べました。

交流集会では、瀬戸内市立長沼中学校卒業生、山陽女子中学校・高等学校、広島県の福山市にある盈進中高ヒューマンライツ部の生徒たちの平和と人権の輪を広げる活動が、演劇や語りやビデオで紹介されました。

中高生が、積極的にハンセン病の差別と偏見の歴史を学び、入所者と触れ合う姿に胸がジーンとしました。



3日目の21日は最終日。岡山駅からバスで長島愛生園・邑久光明園に向かいました。

賑やかな市街を抜け、坂の多い山道を進みます。「どんなところなんだろう」と入所者が、ここに連れてこられた頃に思いを馳せました。

午前中は4つの分科会があり、私は家族の被害をパネリストを含む4人の体験を聴きました。想像を絶する差別やいじめ、仲間外れに苦しめられた経験、病気の母と引き離された悲しみを語りました。何十年も語ることがなかった家族の方たちの訴えに、私も一緒に泣きました。

昨年は総勢568人のハンセン病家族が熊本地裁に提訴しました。（4ページに続く）

午後から、愛生園に入所して70年になる北海道出身のキミ子さんを私たちと北海道の弁護士さんらで訪問しました。とても懐かしがってくださいました。



その後はフィールドワークで収容棧橋（左写真）や回春寮、塀だけになった監房、納骨堂、歴史館、隔離の象徴といわれる10坪住宅などを見学しました。



穏やかで明るい瀬戸内海の風景とは対照的に入所者は過酷な生活を強いられ、社会と隔離され続けたのです。

こんな酷い人権侵害が長い年月行われてき

たことに改めて強い怒りを覚えました。

観光はありませんでしたが、ハンセン病への差別と偏見の歴史を学び、発信する中高校生の姿に希望を見つけました。

みな子の小さな見聞録

大きな集会や講演会は新聞で報道されることも多いですが、小さな講演会は書いておかないといつの間にか忘れてしまいます。伝えておきたいことを書きとめます。

3月15日、小樽で小林多喜二祭にも長く携わり、労働運動に情熱を傾けて来た寺井勝夫さんのお話を聞きました。

今年90歳になるというのに、声に張りがありました。72年前の終戦を迎えた時の話や、その後、共産党の話聞く機会があり「平和を守り、誰もが平等に生きる社会にしよう」という理念に感銘を受け入党された話から語り始めました。

1948年に国鉄を退職。共産党の専従になりました。その後、労働運動の中で無届けの集会を開き逮捕されます。1959年から1963年まで政治犯として網走刑務所に収監。14人も人が不当に逮捕されました。寺井さんは黙秘を貫いたと言います。雑居房に入れられましたが、網走日記に毎日の生活を克明に記録。本を読み、文芸部の編集を担当します。刑務所内で芝居もしたそうです。



網走で書いた詩「小林多喜二のお母さんの米寿

と入党を祝う」を朗読。「私はいま 秋深いあばしりのひとやのなかで よろこびに胸をはずませながら 闘いの決意をよりつよくかためています お母さん ほんとにほんとにおめでとう」

非人間的なものに抵抗した、寺井さんの若き日の青春のみずみずしい気持ちがあふれていて感動しました。

治安維持法の犠牲になった小林多喜二のことを忘れてはならない。共謀罪で暗い時代に逆戻りさせてはならないと寺井さんのお話を聴き、強く思いました。

この会にはノーマ・フィールドさんもシカゴから参加されました。



4月18日、RKB毎日放送(福岡市)のディレクター西嶋真司さんのお話と西嶋さんが制作された「十字架とショパン」の上映がありました。

西嶋さんは、「在日の人

々のことや、慰安婦問題は新聞もテレビも報じない。日本のメディアの危機は、自主規制ではないか。事なかれ主義がある」と述べました。メディアの役割は権力の監視です。しかし、日本の報道の自由度は72位です。

西嶋さんはドキュメンタリーで真実を伝えたいと頑張っています。お話を聴いて、いい報道は応援して行かなければと思いました。メディア・アンビシャスが主催しました。

「十字架とショパン」の西嶋さんの解説文です。「ピアニストの崔善愛(チェソング)さんは、かつて紋押捺を拒否したことから再入国許可を受けられず、特別永住者の資格を奪われた。留学先のアメリカから帰国できない不安の中で、善愛さんはショパンの音楽に心を揺さぶられた。帝政ロシアの弾圧から逃れるために、祖国を離れたショパンの悲しみが、朝鮮戦争の混乱を逃れて来日した父親の思いに重なった。善愛さんの父親は在日韓国人・朝鮮人の人権運動に半生を捧げた故・崔昌華(チオエチャンホア)牧師。一人ひとりに付けられた名前は、人間の尊厳の基礎であり、在日の人々の名前の読みを当時慣例だった日本語読みから韓国・朝鮮語読みに変えるように訴えた。今もヘイトスピーチがやまない日本社会の中で、在日であることを隠し続ける人も少なくない。善愛さんは在日として生きることに苦悩しながらも、日本人の良心を信じる。『日本が私を育ててくれて、信じられる人に出会えた。厳しい歴史や現実があってもなお、生きて行きたい国だとわかりました』と穏やかな語り口の中に、日本人に対する厳しい問いかけが込められている」。

善愛さんは映像の中で、「自宅の表札を見られ、ヘイトスピーチを受けるのではないかと不安になった」とも語っていました。

本 Books



十字架のある風景

崔善愛著 いのちのことば社
1500円＋税

崔善愛さんは、4月14日、櫻井よしこさんらを相手取った名誉毀損裁判の第7回口頭弁論後、北光教会の大ホールに移動して「ピアノトークコンサート」を開き、ロシアに支配された祖国ポーランドを20歳で後にしたショパンの曲に、自らの歩みを重ねて演奏しました。心に深くしみ入るものでした。

本書は在日3世である著者が、生まれ育った小倉を見つめなおし、綴った心の軌跡です。

タイトルである「十字架」は、小倉の小高い山にあるメモリアルクロスをさし、朝鮮半島で戦死した国際連合軍の将兵の慰霊に建てられたものだと気づいた時、父の運命との不思議な交錯に驚きを禁じ得なかったと記しています。

牧師であった父、崔昌華（チオエ・チャンホア）さんが民族の誇りを取り戻そうと人権活動に没頭する姿を善愛さんは子どもの頃は理解できなかったと語っています。善愛さんは日本国籍を取得することにも抵抗を感じることはありませんでした。14歳になって初めて外国人登録証を手にする際の指紋押捺も受け入れました。でも、被差別部落の友人の告白や、妹が押捺に拒絶反応を示したことで「自分も本当はイヤだった」。差別を我慢することは、差別を繰り返すことにつながると気が付きます。21歳の時、善愛さんは父や妹らと指紋押捺拒否の裁判を起こしました。脅迫の手紙や電話が届いても、指紋押捺を拒否しました。

「私たちにできるのは、痛いと言って表すだけです。その痛みに気づいてもらうために指紋押捺を拒否しました」と記しています。

ピアノ留学で渡米した善愛さんは、日本再入国の許可を得られず、特別永住者資格も失います。その時の寄る辺のない悲しみが胸に突き刺さりました。指紋押捺は、戦争を起こし、侵略した時の日本人の心の表れではないか？と善愛さんは訴えます。最高裁まで行った闘いは敗訴しますが、昭和天皇の死去に伴う大赦で免訴になりました。しかし、全国に広がった押捺拒否の動きが2000年の制度撤廃に結びついたのでした。どれほど多くの在日の人たちを励ましたかと思うと胸が熱くなります。

善愛さんはあとがきで「隣人のことや、世界の人々をもっと身近に感じられるように、そう願ってやまない」と結びました。

父の生き方をしっかり受け継ぎ、率直に語る善愛さんが清々しく、私も気持ちがあらつきそうになったら、この本をまた開きたいと思った一冊でした。



スノーデン、監視社会の恐怖を語る

小笠原みどり著 毎日新聞出版
1400円＋税

スノーデンは、米国政府による監視という衝撃的な事実を内部告発しました。（200号）

の映画紹介もご覧ください）

今、まさに共謀罪を国会で政府与党などは数の力で通そうとしています。市民生活をいくらか執拗に監視してもテロ防止には役立たないと、スノーデンは語っています。

いまや世界中のメールやライン、SNS上のコミュニケーションを大量収集するNSA（米国家安全保障局）によって、ターゲットにした人物の送受信したメールや閲覧したサイトがひたすら追いかけてられています。日本の米空軍横田基地に勤務していたスノーデンは「特定秘密保護法は実は米国がデザインしたもの」とも明かしています。ここまで、日本は米国に支配されているのかとショックを受けました。日本の法制度が米国の違法監視システムを合法化する方向に動かされていることを知ると、共謀罪もまた米国の戦争-監視体制の一翼を担うものであることは疑いようありません。スノーデンは「監視はどんな時代でも最終的に、権力に抗する声を押しつぶすために使われていきます。そして反対の声を押しつぶすとき、僕たちは進歩をやめ、未来への扉を閉じるのです。」と語っています。素晴らしい洞察力に、私も黙っていても権力の思うツボだと、励まされました。

特に印象的だったのは「プライバシーは個を守るためにある。自分自身のために考える自由が必要だ。プライバシーは個人の権利の源だ。プライバシーがなければ言いたいことを言い、あるがままの自分ではいられない」と語っていることでした。民主主義を的確にとらえ表現するスノーデンの勇気を尊敬します。併せて「スノーデン 日本への警告」も読むと監視社会の脅威がよくわかります。



風かたか 「標的の島」撮影記

三上智恵 大月書店1500円＋税

著者は「標的の村」「戦場ぬ止み」で、米軍基地建設を強行される高江や辺野古、自衛隊配

備計画が進む宮古島や石垣島などで、国を相手に闘う、住民の姿を撮り続けてきた監督です。

「風（かじ）かたか」とは沖縄の言葉で風よけという意味で、本書はその撮影記です。

昨年4月に起きた元海兵隊員によって女性が暴行され殺害された事件。県民大会で、古

み)」でわが子の「風かたか」になりたいと歌いました。

オスプレイが名護市の海岸に墜落した事件は記憶に新しいと思います。沖縄の新聞以外はどこも「不時着」と報じました。しかもオスプレイの着陸帯の完成式典まで政府は行いました。住民の怒り闘う姿を描きます。

今度こそ「風かたか」になろうと立ち上がった人々に感動を覚えました。映画は見逃しました。是非、再上映を期待しています。

108年の幸せな孤独

キューバ最後の日本人移民、島津三一郎

中野健太著 角川書店
1700円＋税



著者はフリーのドキュメンタリー制作者です。キューバに魅せられ、取材を重ねていた著者は、100歳間近の日本人移民がいることを知ります。小さな島の老人ホームで暮らす島津三一郎さんでした。

足跡をたどると移民たちの知られざる姿が浮き彫りになっていきます。新潟県生まれの島津さんは、異国の地で成功を夢見て1928年、横浜港から船でキューバに渡りました。一移民が、第二次大戦中は敵国人として収容され、戦後はキューバ革命に身を投じ、冷戦、国交回復と、激動の時代を生き抜くこととなります。そこには私たちが知らない移民の姿がありました。

カリブの小島に住む108歳の島津さんはスイカを育てて暮らしましたが、一度も日本に帰国できませんでした。たくさんのお金を持ち帰れなかったからです。

でもキューバに住んでいれば、わずかな年金でも、老人ホームで安心して暮らせるシステムがありました。島津さんの言葉「私はお金を持っていない。だから長生きすることができたんです」が印象に残りました。

日本に帰っていたら、老人ホームに入れたでしょうか？ 入れたとしても自分らしさを保つのは難しかったではないでしょうか？

歯のない三島さんは普通の食事をしています。体調の悪い時以外は散歩も自由というのも驚きでした。

悲しいことが多い移民史の中で、日本人移民たちが、今日、明日の努力では成し遂げられない立派な果実（スイカ）をキューバに実らせてくれたことは、未来を生きる我々に明るい希望を遺してくれたと讃えています。

島津さんの穏やかな最期に、異国での苦労が報われたようで、「いい人生でしたね」と心のなかでつぶやきました。歳を取っても病気になっても安心して暮らせるキューバ、一度は訪ねてみたいです。

「生きていることを楽しんでターシャの言葉」や、人生フルーツで描かれた世界「ひでこさんのたからもの」なども紹介したかったのですが紙面スペースが尽きました。塔和子さんの詩集「希望よあなたに」も良かったです。（み）



痛みのペンリウク 囚われのアイヌ人骨

土橋芳美著 草風館
926円＋税

ペンリウクさん（1832～1903年）は平取アイヌコタン（集落）の首長でした。

北大によれば、山崎教授は1931～1934年に平取などでアイヌ墓地を発掘し、ペンリウクさんのものを含め、少なくとも47人の遺骨を大学に持ち帰ったのです。ほかの約1000人分とともに現在も北大に取り残されたままです。

土橋さんはアイヌ史上の過去から現在にいたる深刻な出来事の語り伝えとして、また叙事詩として書いたのが本書です。

土橋さんは、ペンリウクの弟の家系であることを告げ、自分でも引き取り手になれるかを聞きました。北大側は「大丈夫です。あなた以外に名乗り出る人がいなければ、お引き取りになれます」と言われたにもかかわらず2016年9月には「ペンリウクさんの遺骨ではない」と言われます。土橋さんはこの事実を伝えたいと本にしました。

土橋さんはご自分の先祖の名前が北大の納骨堂にある事を知った時、「自分が裸にされ十字架に架けられ、札幌の大通街にでもさらされているかのような恥ずかしさ、悔しさに涙した」と著書の中で綴っています。土橋さんは遺骨との面会の際、「平取1号と書かれた箱の中に頭蓋骨と少しの骨片があるのみ。頭蓋骨に「平村ペンリウク」とマジックのようなもので書かれた文字を確認」したとあります。遺骨にマジックで名前を記入することが出来るのも、「実験材料」としか扱って来なかったからなのでしょう。北大側は遺骨をいまだに「研究材料」としか見ておらず、真摯に遺骨を返そうという気持ちはさらさらないのでした。

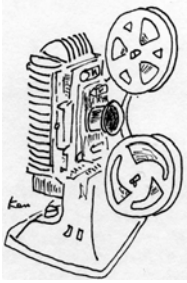
土橋さんはある時からペンリウクさんの声が聞こえるようになり、ペンを持ちその想いと証言を記しました。

私の生まれは平取です。小さな時しか住んではいませんが、母方の祖父母がこの地で農業を営んでいたのも、小学校の夏休みは、いつも平取で川や野で遊びました。こんなひどいことが行われていたことに怒りでいっぱいになりました。

土橋さんの渾身の訴えに心が震えました。

本の紹介だけでも、私がどんなことに関心があるか分かってしまいますね。共謀罪が成立したら、内心の自由が奪われてしまいます。（み）





マンチェスター・ バイ・ザ・シー

ケネス・ロ
ナーガン監
督・脚本



ボストンで
便利屋をしな
がら孤独に暮

らしていたリー（ケイシー・アフレック）は、兄の死をきっかけに故郷のマンチェスター・バイ・ザ・シーに戻り、甥のパトリックの後見人になります。二度と戻ることはないと思っていたこの町で、リーは過去の悲劇と向き合わざるを得なくなります。

リーの孤独と哀しみを体現したケイシー・アフレックの繊細で誠実な演技が素晴らしい。じっくりと丁寧に織り込まれる何気ないセリフや表情、息遣いひとつひとつに引き込まれました。甥のパトリックが不平を言うシーンや、朝食の準備をする様子といった日常風景から、リーの元妻ランディ（ミシェル・ウィリアムズ）が心の傷をさらけ出すドラマチックなシーンまで、感情の機微をすくい取り、奥深さを感じとれます。哀しみのなかにもユーモアが随所にあり、生きるってこういうことの積み重ねだと共感。この中に私がいてもおかしくないと思えるのもいいなあと思いました。

登場人物それぞれに生きる哀しみを抱えています。だからこそ人の辛さを受け止め、互いに手を差し伸べるのです。リーは癒えない傷も、忘れられない痛みも、その心ごと生きていく中に希望も見つけます。複雑な心模様を見事に演じたケイシー・アフレックは久しぶりに忘れがたい俳優になりました。

俳優の演技を支えたのは脚本の力でもありました。チラシの文章にはこうあります。「ケネス・ロナーガンの脚本はリアリティとユーモアが満載で、そのまなざしは寛容さにあふれ、ささやかだが確かな希望を感じさせる。静かに心に染み入る傑作」と。



ターシャ・テューダー — 静かな水の物語

松谷光絵監督

アメリカで最も愛される
絵本作家のターシャ

ャ・テューダーの自然に囲まれた暮らしが映画になりました。

何があっても「生きることを楽しもう」という気持ちを忘れないで、と語りかけてくれました。

56才の時にアメリカ、バーモント州の山奥に建てた18世紀風の農家で、一人暮らしを続け、その土地にあった草花を育ててきました。

雑草も植え、自然の力に満ちた壮大な庭が美しい。自然と共に生きてきた暮らしがたくさんの絵本になりました。ゆったり、ゆっくり、ターシャさんの時間は流れていきます。

ターシャさんのように、好きなことを心から楽しむ生き方は、憧れますができそうではできませんね。四季折々の自然をターシャさんと共に巡り、私もいい時間を過ごすことができました。なんだか心が洗われました。手作りの人形もとても味があって、まるで家族の一員のような感じでした。4人の子どもを育て、ひ孫たちにもターシャさんの生き方が伝わっているのも素敵でした。

ターシャさんは92年の生涯を自分らしく貫きました。真の豊かさとは何か、生きる喜びとは何かを静かに伝えてくれ、感動しました。

人生タクシー

ジャファル・パナヒ
監督

情報統制下にある
イラン。ジャファル



パナヒ監督は、反体制派の映画監督として知られ、国内で何度も上映禁止処分を受けました。それでも決して萎縮しないのがパナヒ監督です。なんと映画製作を禁止される中で、驚くべき形で映画を作りました。

監督自身がタクシー運転手に扮して乗客の会話や映像を自動のハンディカメラで撮り、テヘランの街に暮らす乗客たちの、人生模様を描き出したのです。イラン社会を鋭く、しかもユーモアを込めて批評したのです。

死刑の是非を議論する男女、海賊版のDVDを販売する人、映画を学ぶ大学生、血まみれの夫を病院に運ぶ妻など。「えっ、本当のことなの？」と私の頭も混乱しました。乗客の会話からイランの実情が垣間見えてきます。

小学生の姪は文化祭で映画を上映しようと思いますが、政府の制約の中で思うような映像が撮れません。自由であるべき創作活動への制限をユーモラスに皮肉るのです。

停職処分を受けた女性弁護士も同乗。人権侵害の救済に奔走する彼女を通して痛烈に政府を批判するのです。

弾圧に負けないぞというメッセージに感動しました。パナヒ監督は笑顔とユーモアで闘っています。国内では上映は禁止されましたが、2015年ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞しました。映画で事実を伝える希望を見ました。



ヨーヨー・マと旅するシルクロード

モーガン・ネヴィル
監督

世界的なチェリスト、ヨーヨー・マが2000年に音の文化遺産を世界に発信するために立ち上げたシルクロード・アンサンブルの活動を追ったドキュメンタリーです。

異文化がクロスするシルクロードにゆかりがあり、さまざまな歴史的、文化的、政治的背景を背負ったメンバーたちとともに、国境を越えた文化を模索してきました。

クラシックという枠にはまらない、さまざまな楽器（チェロ、クラリネット、ケマンチェ、中国琵琶、バグパイプなど）を演奏する音楽家が登場します。ペルシャの弦楽器ケマンチェ奏者はイラン革命の時に、楽器ひとつで国外に逃げました。文化大革命を経験した中国琵琶奏者もいます。シリアの内戦の勃発のため、国外追放を余儀なくされたクラリネット奏者もいます。

彼らの波乱の人生と音楽との関わりが描かれ、さまざまな楽器が一体になった時のダイナミックさ、さらに多様な民族の悲しい歴史などが演奏に込められていて、涙が出ました。

彼らが一緒に演奏する音楽は、国境もジャンルも超越しています。国境を超えた人々のハーモニーに心を揺さぶられました。ヨーヨー・マの、「世界は音楽で変えられる」という思いの深さに感動しました。

ライオン

25年目のただいま

ガス・ディヴィス
監督



インドで生まれた少年は5歳の時に迷子になり、オーストラリアで養子になります。25年ぶりに故郷の家を見つけたという実話を映画化した作品。

自らのルーツを探すように、サルーは20年以上も前の記憶とグーグルアースでついに見つけます。

インドの貧しい母子家庭に暮らし、スラム街で兄と遊びます。サルーは生命力があり賢い。兄を助けて働く姿が印象的です。ある日、兄とはぐれ回送列車で、遠い地に運ばれます。家に帰るあてもなく、サルーは、オーストラリアの裕福な家庭に養子に出されました。

養父母に大切に育てられ大学生になったサルーは、人生を取り戻し未来への一步を踏み出すために、家族を探し始めるのです。サルーが自分を取り戻すまでの軌跡が丹念に描かれます。

インドでは貧しさのために、児童労働が深刻で孤児が多い現実も伝えてくれました。

養母（ニコール・キッドマン）がなぜ子どもを生まなかったかを語る場面に、博愛の意味を教えられました。

弱者切り捨てへの怒りと

人間の尊厳

『わたしは、ダニエル・ブレイク』

樋口 みな子

イギリスと言えば「ゆりかごから墓場まで」という標語があるほど、福祉の先端を行っていた時代があります。ケン・ローチ監督は引退を翻してまで、社会的弱者が冷たい福祉制度に苦しめられている現状に怒り、映画化しました。

妻に先立たれ心臓発作で倒れて、雇用支援手当を受けていた大工のダニエルは、ある日支援手当が受けられなくなり、役所で手当の継続を訴えるのですが、パソコンを使えないと申請できない。意地悪な質問等、複雑な制度は明らかに弱いものいじめです。そんな時



に給付金を受けられずに途方にくれている、シングルマザーのケイティと知り合います。二人の子どもを必死に育てていま

した。ダニエルは自身も大変なのに、ケイティ一家を親身になって助けます。

病気や離婚で貧困に苦しむ人は、日本も同じです。弱者切り捨ての政策には怒りを覚えました。貧困に陥ると人として生きる権利さえも失うのか？とケン・ローチは怒ります。ダニエルはそんな絶望的な状況にあっても、人として愛と尊厳を持って生きています。どんなにケイティや子どもたちを励ましたかしれません。懸命に生きる姿を映し出し、ケン・ローチの温かいまなざしに共感しました。あまりにも複雑な申請や、役所の職員の人間性のひとかけらもないのか、と思う冷酷さがリアルでした。ダニエル・ブレイクはこんな制度はおかしいと、壁に落書きします。「わたしは、ダニエル・ブレイク」と。同じように貧困に苦しむ人たちが「よく言ってくれた！」と周りを囲んでダニエルに声援を送る労働者が良かったです。権力への怒りに心の中で拍手していました。

日本も例外なく、格差社会が広がっています。誰もが安心して暮らしていける社会であって欲しいです。役所で尊厳を傷つけられることがあれば、「わたしは、ダニエル・ブレイク」とつぶやこう。個人の尊厳を守り、連帯して闘わなくては、と思います。たくさんの人に観てもらいたい映画です。

私はケン・ローチの作品は、生活に苦しむ人に寄せる温かい目がどの映画からも感じられて、大好きな監督です。世界はこのような映画をまだまだ必要としています。ケン・ローチ監督にはまだまだ頑張ってもらって、映画を撮り続けてほしい。（札幌映画サークルCineast

5月号掲載）

スプリング・エフェメラルの花から 初夏の花へ



カタクリとエゾ
エンゴサク



エゾノリュウキンカ

スプリングエフェメラル。美しいことばですね。「春の妖精」とも「春のはかないもの」とも呼ばれる花たちです。

「春の妖精」といえばカタクリですね。初めて、カタクリの群落を見たのは40年近く前、旭川の突哨山でした。今は全国的に有名になりましたが当時は知られていなく、踏み場もないほどのピンクのじゅうたんに言葉を失ったことを思い出します。写真は浦臼神社のカタクリです。(4月25日)

ぼかぼか陽気に誘われて、野幌森林公園を散歩してきました。フクジュソウやエゾエンゴサク、エゾノリュウキンカ、ミズバショウも咲き始めました。カエルも恋の季節のようです。人が寄ると姿を隠し、鳴くのをやめますが、森中に合唱が聞こえてきました。(4月17日)



春浅く白く輝く樺戸連山



とした曇り空。青空でなかったのが少し残念でした。(4月6日)

沼明けしたばかりの美唄の宮島沼に行ってきました。昼間だったため、マガンとハクチョウは近くの田んぼで落ち穂や畦草を採食中。マガンは5万羽も飛来しているそうです。黄砂が降ってどんより



わが家のリンゴの花が咲きました。1週間前はつぼみでしたが、5月末の陽気で一気に開花。満開です。(5月27日雨の日に)



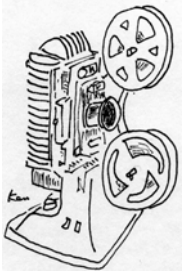
札幌大通り公園は初夏の花でいっぱいです。ライラックの香りが良くて、道行く人も立ち止まって楽しんでいます。(5月13日)



スズランは生まれ故郷の平取を思い出す花です。このスズラン群落が話題になっていましたが、坂道の両脇一面に咲いていたのを懐かしく思い出します。近所で見つけました。(5月25日)

海は燃えている～イタリア 最南端の小さな島

ジャンフランコ・ロージ監督



イタリア最南端にある小さな島、ランペドゥーサ島は、海の透明度が高い観光の島です。ここには飢餓や飢饉が原因で、アフリカや中東から命がけで地中海を渡り、ヨーロッパへ密航する難民や移民たちの玄関口というもうひとつの顔があります。ニュースでは知らされない複雑な世界を目の当たりにして、ジャンフランコ監督が島に移り住んで撮ったドキュメンタリーです。

難民たちは海上で保護され、島内のセンターに送られるため、島民との接触はありません。この20年間で40万人の難民がこの島に上陸しましたが、約2万7千人がその途中の海で命を落としたそうです。

豊かではないけれど、自然に恵まれた島でのびのびと暮らすサムエル少年や漁民と、島に辿りつくまでの苦難を強いられる難民が、対比され描かれます。島のたったひとりの医師バルトロだけが双方に接点がありました。妊婦の難民に超音波スキャンで「無事ですよ」と励ますシーンや、難民の検死に立ち合い、悼む様子に豊かな人間性を感じました。船の上で長い旅をしてきた難民たちの目は、安堵感よりは悲しみにあふれていました。

果てなく続く苦難がこの世界に広がっていることを静かに訴えているようでした。

監督の来日会見の記事を読んだら、難民を診察するバルトロ医師の言葉が紹介されていました。「ランペドゥーサ島は漁師の島だ。漁師は海から来るものはすべて受け入れる」。

難民排斥が各国で強まっています。日本での昨年の難民受け入れは、1万人もの申請に対してわずか28人と知って、「こんなに冷たい国なの？」と驚きました。自分には何が出来るだろうと空しくなりますが、排除は許せません。多様性を認め合える社会であってほしいと思います。

もうずいぶん前のことですが、紙面もないので載せませんでした。銀河通信200号が紹介されました。関心のある方は3月30日付け朝日新聞全道版と4月11日付け北海道新聞江別版をご覧ください。



チャップリンの映画を観て



「街の灯」



「独裁者」



「ライムライト」



「モダン・タイムス」

4月中旬からGWまで12日間に、チャップリン作品12本が上映されました。観客動員数が3000人を突破。

昔、何本かは観ていましたが、改めてチャップリンの「時代を読む力」に驚きました。

「独裁者」での名演説は1面をご覧ください。「街の灯」はサイレント映画です。貧しい盲目の花売り娘とチャップリンの物語。娘のために工面したお金で娘は視力が回復。街角に花屋を開き繁盛しています。偶然通りかかったチャップリンの驚きの表情。娘が恩人だと気づいて、「あなたでしたの？」と問うまなざし。お互いに手を握ったときに全てがわかるのです。胸がいっぱいになり涙が溢れました。素晴らしいラストにしばらく席を立てませんでした。

「ライムライト」は、落ちぶれたコメディアンが、若いバレリーナを励まし、その晴れ舞台を見届け、息を引き取ります。音楽が素敵です。この作曲もチャップリンです。「モダン・タイムス」は機械文明を痛烈に批判しました。是非DVDで観てください。

購読料とカンパをありがとうございます
(敬称略) 3. 17～5. 25

鈴木ゆかり(札幌市) 石原和彦(札幌市) 森脇栄一(札幌市) 安達紀利(札幌市) 小林嘉則(糸満市) 里見清子(甲府市) 高橋雋(札幌市) 守田恵美子(札幌市) 宮原光恵(幌加内町) 益子美登里(札幌市) 新妻徹(札幌市) 菅邦子(三鷹市) 三浦恵美子(旭川市) ミリケン恵子(赤井川市) 神原照子(登別市) 仲俣善雄(札幌市) 長谷川雄助(札幌市) 五十嵐憲子(旭川市) 中島圭子(札幌市) 藤田トシ子(江別市) 大庭保夫(加賀市) さかい廣(札幌市)

祝賀会での、バックナンバー販売などの収入も入れて合計78、200円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。

竹田とし子さん(函館市) 高橋明子さん(小樽市) から書籍、著書をいただきました。ありがとうございました。

郵送読者には振込用紙を同封しました。引き続きご愛読いただけますようお願いいたします。